

グルジア語の能格

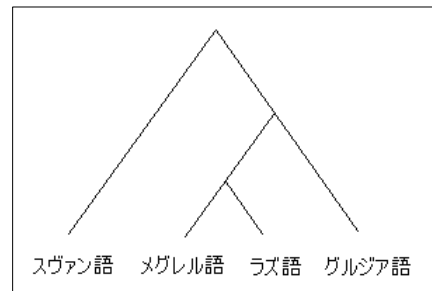
児島 康宏

(日本学術振興会特別研究員/東京外国語大学)

1. グルジア語は、グルジアの公用語で、グルジア及びその周辺地域で話されている。話者は約450万人。南コーカサス（カルトヴェリ）語族に属する。

მე ძლიერ მიყვარს იისფერ თოვლის
ქალწულებივით ხიდიდან ფენა,
მწუხარე გრძნობა ცივი სისოვლის
და სიყვარულის ასე მოთმენა.
ძვირფასო! სული მევესება თოვლით:
დღეები რბიან და მე ვბერდები!
ჩემს სამშობლოში მე მოველე მხოლოდ
უდაბნო ლურჯად ნახვერდები.
ოჰ! ასეთია ჩემი ცხოვრება:

グルジア文字



南コーカサス語族の系統図

音素は以下の通り。

母音 (5) *i, e, a, o, u*

子音 (28) *b, p, p', d, t, t', g, k, k', q', ʒ [dz], c [ts], c' [ts'], j [dʒ], č [tʃ],
č' [tʃ'], s, š, z, ž, x [χ], ǧ [ʁ], h, v, r, l, m, n*

もっぱら主要部後置型で、膠着的な形態法。統語のレベルでは語順はごく一部の要素を除いて自由。動詞は主語と目的語（直接目的語、または間接目的語があれば間接目的語）の人称・数を標示する。

2. 名詞類は9つの格を区別する。以下に示した3つの格のほか、属格、具格、奪格（「…から」）、様格（「…として」）、到格（「…まで」）、呼格がある。1・2人称の人称代名詞は3つの格で同形になる。

	「男」	「少女」	指示代名詞	1SG
主格	<i>k'ac-i</i>	<i>gogo-∅</i>	<i>is</i>	<i>me</i>
能格	<i>k'ac-ma</i>	<i>gogo-m</i>	<i>ma-n</i>	<i>me</i>
与格	<i>k'ac-s</i>	<i>gogo-s</i>	<i>ma-s</i>	<i>me</i>

3. グルジア語は、他動詞の動作主が能格に、被動作主が主格に立つ能格構文を持つ。

- (1) *k'ac-ma* *k'ar-i* *da-xur-a.* 「男が扉を閉めた」
男-能 扉-主 閉める：過
- (2) *k'ar-i* *da-i-xur-a.* 「扉が閉まった」
扉-主 閉まる：過

しかし、能格に置かれるのは、必ずしも他動詞の動作主ばかりではない。動詞によっては自動詞の主語も能格に立つことがある。

- (3) *k'ac-ma* (/ **k'ac-i*) *da-i-sven-a.* 「男が休んだ」
男-能 (*-主) 休む：過
- (4) *k'ac-ma* (/ **k'ac-i*) *i-mušav-a.* 「男が働いた」
男-能 (*-主) 働く：過

4. 動詞は大きく、能格の項をとるものととらないものに二分される。能格の項をとる動詞には他動詞も自動詞も含まれる。能格の項をとらない動詞はすべて自動詞である。逆に言えば、他動詞は常に能格の項をとるが、自動詞には能格の項をとるものととらないものがある。

	能格項をとる	能格項をとらない
自動詞	+	+
他動詞	+	-

能格の項をとる動詞ととらない動詞では、動詞の活用のパターンが形態的に異なる。ある動詞の活用形の項が文脈によって能格になったりならなかったりすることは基本的にない。

5. 能格の項をとる動詞では、動詞が過去形（および、過去形からつくられる接続法過去形）の場合のみ能格の項が現れる。そのほかの活用形では、過去形で能格に立つ項は、主格や与格で現れる。一方、能格の項をとらない動詞では、このような格の交替は起こらない。

	能格項をとる動詞			能格項をとらない動詞	
	主語	直接目的語	間接目的語	主語	間接目的語
未来・現在	主格 s	与格 o	与格 o	主格 s	与格 o
過去	能格 s	主格 o	与格 o	主格 s	与格 o
完了	与格 o	主格 s	—	主格 s	与格 o

表中の s, o は、その項が、動詞形のなかで主語人称接辞(s)で標示されるか、目的語人称接辞(o)で標示されるのかを示している（以下の議論では扱わない）。

【能格をとる他動詞】

- (5) a. *k'ac-i* [主] *k'ar-s* [与] *da-xur-av-s.* 「男が扉を閉める」(未来)
b. *k'ac-i* [主] *k'ar-s* [与] *xur-av-s.* 「男が扉を閉めている」(現在)
c. *k'ac-ma* [能] *k'ar-i* [主] *da-xur-a.* 「男が扉を閉めた」(過去)
d. *k'ac-s* [与] *k'ar-i* [主] *da-u-xur-av-s.* 「男が扉を閉めた」(完了)

【能格をとる自動詞】

- (6) a. *k'ac-i* [主] *i-mušav-eb-s* 「男が働く」(未来)
b. *k'ac-i* [主] *muša-ob-s.* 「男が働いている」(現在)
c. *k'ac-ma* [能] *i-mušav-a.* 「男が働いた」(過去)
d. *k'ac-s* [与] *u-mušav-i-a.* 「男が働いた」(完了)

【能格をとらない自動詞】

- (7) a. *k'ar-i* [主] *da-i-xur-eb-a.* 「扉が閉まる」(未来)
b. *k'ar-i* [主] *i-xur-eb-a.* 「扉が閉まりつつある」(現在)
c. *k'ar-i* [主] *da-i-xur-a.* 「扉が閉まった」(過去)
d. *k'ar-i* [主] *da-xur-ul-a.* 「扉が閉まった」(完了)

きわめて例外的に、二つの動詞 *i-c-i-s* 「知っている」、*u-c'q'-i-s* 「知っている」のみが、現在形で「知っている」主体を表わす項を能格にとる。

- (8) *k'ac-ma* *iap'onur-i* *i-c-i-s.* 「男が日本語を知っている」
男-能 日本語-主 知っている：現

6. 自動詞のなかで、どのような動詞が能格の項をとるのか？ — 以下に、能格の項をとる自動詞と、能格の項をとらない自動詞にどのような意味の動詞があるかを示す例を挙げる。

【能格の項をとる自動詞】

<i>tamaš-ob-s</i>	遊ぶ	<i>pikr-ob-s</i>	考える
<i>lap'arak'-ob-s</i>	話す	<i>sauzm-ob-s</i>	朝食をとる
<i>i-cin-i-s</i>	笑う	<i>nerviul-ob-s</i>	心配する
<i>mđer-i-s</i>	歌う	<i>locul-ob-s</i>	祈る
<i>cxovr-ob-s</i>	住む	<i>cek'v-av-s</i>	踊る
<i>cura-ob-s</i>	泳ぐ	<i>i-ğvi3-eb-s</i>	起きる
<i>t'ir-i-s</i>	泣く	<i>i-3in-eb-s</i>	眠る

【能格の項をとらない自動詞】

<i>k'vd-eb-a</i>	死ぬ	<i>xd-eb-a</i>	…になる
<i>t'q'd-eb-a</i>	割れる	<i>i-ğl-eb-a</i>	疲れる
<i>rč-eb-a</i>	残る、留まる	<i>e-lod-eb-a</i>	…を待つ
<i>i-ğ-eb-a</i>	開く	<i>e-xmar-eba</i>	…を手伝う、助ける
<i>vard-eb-a</i>	落ちる	<i>dg-eb-a</i>	立つ
<i>i-zrd-eb-a</i>	育つ	<i>jd-eb-a</i>	坐る
<i>tb-eb-a</i>	温まる	<i>mi-d-i-s</i>	行く
<i>i-k'arg-eb-a</i>	失くなる	<i>ar-i-s</i>	…である、いる、ある

7. 上に挙げた例から分かるように、主語を能格にとる自動詞は一般に「行為者的な、能動的な」動作主の行為を表わす。それに対して、主語を主格にとる自動詞には、「非行為者的な、非能動的な」主体に起こる事態を表わすものが多い。次の例(9)、(10)では、同じ語根からつくられた自動詞が用いられているが、主語の格が異なる。主語の格と、事態が能動的な行為であるかどうかに対応しているように見える。

- (9) *gogo-m* *q'inul-ze* *i-srial-a.*
少女-能 氷-上で 滑る：過
「少女は氷の上で滑った（たとえば、スケートで滑った場合）」

- (10) *gogo-∅* *q'inul-ze* *da-srial-d-a.*
少女-主 氷-上で 滑る：過
「少女は氷の上で滑った（たとえば、滑って転んだ場合）」

8. しかしながら、主語の格の選択は、常に動作主性の有無に対応しているとは言えない。たとえば、能格の項をとる自動詞のなかには、意味的に主語が動作主的とは考えにくい場合がある。次の例(11)、(12)では、能動的な動作主とは解釈しにくい無生物の主語が能格に置かれている。

- (11) *čaidan-ma* *i-ğiğin-a.* 「やかんがヒューヒュー音を立てた」
やかん-能 ヒューヒュー音を立てる：過
- (12) *vard-ma* *i-q`vavil-a.* 「バラが咲いた」
バラ-能 咲く：過

ただし、このような例がわずかにあるものの、能格の主語をとる自動詞では、主語が能動的な行為をおこなう動作主を表すものが圧倒的に多い。

9. 一方、能動的な行為を表わしているのにもかかわらず、自動詞の主語が能格ではなく主格で現れる場合はまれではない。「立つ」「坐る」「横になる」のような姿勢の変化を表わす動詞や、「行く」「来る」などの移動を表わす動詞は主格の主語をとる。

- (13) *gogo-∅* *a-dg-a.* 「少女は立ち上がった」
少女-主 立つ：過
- (14) *gogo-∅* *sk'ola-ši* *c'a-vid-a.* 「少女は学校へ行った」
少女-主 学校-へ 行く：過

能格の主語をとる自動詞の多くから、「…し始める」という意味を表わす動詞を規則的に派生することができるが、その結果、派生された自動詞は主格の主語をとる。

- (15) a. *bavšv-ma* *i-t'ir-a.* 「子供が泣いた」
子供-能 泣く：能
- b. *bavšv-i (*bavšv-ma)* *a-t'ir-d-a.* 「子供が泣き出した」
子供-主 (*-能) 泣き出す：過

また、主語に加えて間接目的語をとる自動詞では、主格の主語をとりながらも、能動的な行為を表わすものが多い。たとえば、*miesalma* 「…に挨拶した」、*daexmara* 「…を手伝った」など。

- (16) *dato-∅* *nino-s* *mi-e-salm-a.* 「ダトはニノに挨拶した」
ダト-主 ニノ-与 挨拶する：過
- (17) *dato-∅* *nino-s* *da-e-xmar-a.* 「ダトはニノを手伝った」
ダト-主 ニノ-与 手伝う：過

項として主語のみを持つ自動詞 *ilap'arak'a* 「…が話した」は能格の主語をとるが、同じ語根からつくられる、主語と間接目的語を持つ自動詞 *elap'arak'a* 「…が…と話した」は主格の主語をとる。

- (18) *dato-m* (/ **dato-∅*) *i-lap'arak'-a.* 「ダトは話した」
ダト-能 (/ *-主) 話す：過
- (19) *dato-∅* (/ **dato-m*) *nino-s* *e-lap'arak'-a.* 「ダトはニノと話した」
ダト-主 (/ *-能) ニノ-与 …と話す：過

10. 自動詞が能動的な行為を表わすかどうかと、主語の格の選択はかなりの程度に相関しているものの、上に挙げた例から分かるように、それにそぐわない場合もある。それらの例をすべて説明することは難しいが、一つには、動詞のアスペクトが関わっていることが指摘できる。能格の主語をとる自動詞には、内的限界性を持たない (*atelic*) 事態を表わすものが多いが、それに対して、主格の主語をとる自動詞には、内的限界性を持つ (*telic*) 事態を表わすものが多い。「立つ」「坐る」「行く」など、能動的な行為を表わすにもかかわらず自動詞の主語が主格で現れるのは、これらの動詞がアスペクト的に内的限界性を持つためであると考えられる。「…し始める」という意味の動詞が自動詞から派生されると、必ず主格の主語をとることも、アスペクト的な性質に因るものであると説明できる。

11. 動詞のある活用形について、主語の格標示に複数の可能性が生じることは基本的にない。しかし、2、3の限られた動詞で、主語の格の選択の「揺れ」が観察されることがある。次の例の動詞「約束する」は、本来は自動詞として扱われ、例外的に2つの間接目的語をとるが、実際には能格構文が用いられることも多い。

- (20) a. *dato-∅* *nino-s* *da-h-p'ir-d-a* *sačukar-s.*
 ダト-主 ニノ-与 約束する：過 贈り物-与
- b. *dato-m* *nino-s* *da-h-p'ir-d-a* *sačukar-i.*
 ダト-能 ニノ-与 約束する：過 贈り物-主
 「ダトはニノに贈り物を約束した」

12. グルジア語を含む南コーカサス語族では、スヴァン語にもグルジア語と同様の体系が見られ、祖語がこのような体系を持っていたと想定される。しかし、ラズ語とメグレ語ではそれぞれ独自の変化を遂げた。ラズ語では、能格の項をとる動詞で、動詞の活用形にかかわらず一貫して主語が能格に立つようになった。一方、メグレ語では、過去形において、すべての動詞で主語が能格で現れるようになった。

グルジア語・スヴァン語の体系

	能格をとる動詞		とらない動詞
	主語	直接目的語	主語
未来・現在	主格 s	与格 o	主格 s
過去	能格 s	主格 o	主格 s

ラズ語の体系

	グ・スで能格をとる動詞		とらない動詞
	主語	直接目的語	主語
未来・現在	能格 s	主格 o	主格 s
過去	能格 s	主格 o	主格 s

メグレリ語の体系

	グ・スで能格をとる動詞		とらない動詞
	主語	直接目的語	主語
未来・現在	主格 s	与格 o	主格 s
過去	能格 s	主格 o	能格 s

13. グルジア語の体系をめぐって、過去には研究者のあいだでさまざまな論争があった。以下の論文等を参照されたい。

Harris, Alice C. (1982) Georgian and the unaccusative hypothesis. *Language* 58: 290-306.

Harris, Alice C. (1990) Georgian: a language with active case marking — a reply to B.G. Hewitt. *Lingua* 80: 35-53.

Hewitt, Brian G. (1983) Review of Alice C. Harris, Georgian syntax: a study in relational grammar. *Lingua* 59: 247-274.

Hewitt, Brian. G. (1987) Georgian: ergative or active? *Lingua* 71: 319-340.